

小国開放経済における最適な財政支出の反転

高久 賢也*

北野 重人†

概要

本稿は、政府が対外借入を行う小国開放経済の RBC モデルに基づき、財政支出を政府債務の大きさにシステマティックに反応させることにより生じる財政支出の反転について、その厚生水準に及ぼす影響を検討する。Schmitt-Grohé and Uribe (2004) のアルゴリズムに従って、モデルの方程式体系を二次近似することによってモデルを解き、代表的家計の期待効用の大きさを測ることにより、財政支出の反転が、それが無い場合と比べて、厚生のパフォーマンスを改善させるのかどうかを分析した。その結果、対外借入金利におけるリスクプレミアムが比較的大きい場合には、政府による財政支出の反転は、厚生のパフォーマンスを改善させることが確認された。また、望ましい租税政策の議論 (Bi (2010)) における、税率のボラティリティと対外借入金利のボラティリティとの間のトレードオフはみられず、望ましい財政支出の反転は、両者のボラティリティをより小さくすることがわかった。これは、ソブリン危機に直面している欧州諸国のようなケースにおいて、政府による財政支出の反転が、望ましい債務安定化政策のひとつとなりうることを示唆している。

*名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程

†神戸大学経済経営研究所